

「七百さいの大きさ」

「おーい ひろし おじいちゃんよ こおり山こうえんに さんぽに 行かないか。」

「うん おじいちゃん。こおり山こうえんなら、せいかつかの べんきょうで 行ったところがあるよ。学校の すぐうらだよ。」

ひろしは なんだか わくわくしてきた。

こおり山こうえんに つくと まっさきに てんぼうだいへ あがった。ひろしは、ここから見る 吉田の町が 大きかった。

「ひろし。おじいちゃんより もっと おじいちゃんが いるんだよ。すがじんじやに あいに行こうか。」

「すがじんじやは お正月に 行ったことが あるけど・・・ おじいちゃんの おじいちゃんって いなかったけどな。」

すがじんじやに ついたが なにもなかった。ひろしは すこし がっかりした。

「これが、おじいちゃんの おじいちゃんだよ。」

ひろしの おじいさんは、にっこりして 大きな木の前に 立ちどまった。

大きな木が 目の前に 五本 あらわれた。

「うわあ。でっかい木だな。なんて いう 名前の 木なの。」

「大きい すぎの木だから 大きさと いうんじやよ。」

「ひろし、この木は、なんさいだとおもう。」

「おじいちゃんの おじいちゃんだから 百さい くらいかな。」

ひろしは、じしんまんまんに こたえた。

「は は ひろし この大きさは おじいちゃんが 子どものころから ずっとここに あったんだ。ここで 友だちと いつもよくあそんだもんじや。」

「なつの あつい日も ふゆの さむい日も たいふうや ゆきや 大あめにも まけず なんと七百ねんも ここに きている 木なんじや。だから 七百さいじや。」

ひろしは、なんだか ふしぎな きもちになった。

「ひろし おじいちゃんと 手をつないで この木を つかまえられるか やってみよう。」

ひろしは おじいちゃんだったら てを つなげるかなとおもって おもいきり てをのばしたが まったく とどかない。おじいちゃんの すがたは この木で すっかり 見えなくなった。

「ひろし ゆっくり 大きいのうえのほうを 見てごらん。」

青い空に まっすぐ 一ちよくせんに のびている すぎの てっぺんは、もう空にとどきそうなくらいだった。大きいはっぱや えだの あいだから たいようの やさしい光が さしこんでいた。

ひろしは そっと 大きさを さわった。木のかわを よく見ると たてに 大きくわれ そのわれ目に ゆびが はいりそうで ごごつとしていた。上のほうには カナブンや セミがたくさん あつまって 楽しそうに 休んでいた。大ききも にっこりわ



らっているように 見えた。

「おじいちゃんが うまれる ずっと 前から この 吉田の町の 人たちや こおり山に すむどうぶつや 虫たちを 七百年ものあいだ やさしく 見まもって いるんじや。」

「この木たちを 見ると なんだか 元気が わいてくるんじや。」

おじいちゃんは、ゆっくりと ベンチに こしを おろした。

「ひろし ここから 見てごらん。五本の 大すぎが 話をしているように 見えんか。」木の ねもとの まわりも きれいに はかれ 草一つない。ちいきの 人が 毎日きれいにして まもりつづけていることを おじいちゃんが おしえてくれた。

ひろしは しばらく じっと 五本の 大すぎを 見ていた。

「おーい ひろしくん。あしたの 土よう日 どこかへ あそびに いこうよ。」

「どこが いいかな。そうだ みんな すぐ近くに とっておきの 場所があるんだ。みんなで行って みようよ。」

そういって ひろしは、にっこり わらった。